

研究論文〔査読論文〕

診療放射線技師の知識情報の取得・活用による 病院内での役割の向上と医療への貢献

片桐 邦彦

立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科

名取 隆

立命館大学大学院テクノロジー・マネジメント研究科教授

キーワード：診療放射線技術、知識取得伝達、生涯学習、学習環境、コミュニケーション

1. 研究背景

従来病院組織では、医師や看護師を中心に「チーム医療」を形成し患者の治療にあたってきた。平成27年には診療放射線技師法が改正され施行された。内容は診療放射線技師の業務拡大である。診療放射線技師法改正には、診療放射線技師が実施する検査に伴い必要となるCT、MRI検査時の造影剤の血管内投与、投与後の抜針・止血の行為、下部消化管検査時などの肛門からのカテーテルの挿入などについて、診療の補助として医師の指示を受けて行うものとし、業務範囲に追加される。また診療放射線技師が、病院又は診療所以外の場所において、健康診断として胸部エックス線撮影のみを行う場合に限り、医師又は歯科医師の立会いを求めないとされた¹。日本放射線技師会等で業務拡大統一講習会・研修会を行い、根付かせようとしているものの、それが役立っている施設は少ない。

片桐²では病院手術室を社会ネットワーク分析し、診療放射線技師の病院内での位置を計測したところ、診療放射線技師は医師、看護師をはじめとする医療専門職を結ぶ位置におり、医師、看護師をはじめとする医療専門職の結節点にいたることがわかった。診療放射線技師は、病院の中における各診療科をつなぐ役目を担い、各専門職の媒介役をする潜在能力がある職種であると認められる。にもかかわらず、病院組織内では、診療放射線技

師が医師、看護師をはじめとする医療専門職の結節点の位置にいと認識している人は少なく、加えて医師と診療放射線技師の関係は依頼と受託だけで認識されており、診療放射線技師はその立場を生かし切れていないとみられ、診療放射線技師の業務拡大が大きな課題である。

本稿は診療放射線技師である筆者の業務経験がベースとなっている。

2. 研究目的

本稿の目的は、診療放射線技師が院外で開催された学会や研修会等で得た知識情報を獲得し、それらの情報を医師・看護師をはじめとする医療専門職に的確に伝達できているかどうかを検証することである。研究目的を具体的に言えば以下の通りである。

最初に、診療放射線技師が院外の研修会等に参加し得られた技術情報が所属部署に伝達ができ、所属部署メンバーが理解し活用され、病院全体の業務の効率、医療の質の貢献につながっているかについて、診療放射線技師にアンケート調査を実施し、アンケート結果を元に重回帰分析と記述統計（平均値と標準偏差）を行った。

次にアンケート結果のベストプラクティス、ワーストプラクティスにインタビュー調査をした。

最後に重回帰分析と統計記述、インタビュー調査を元に診療放射線技師が業務拡大を実現して

いるかどうか、そして、診療放射線技師が知識情報の取得、活用して病院内での役割の向上と医療への貢献を果たしているのかどうかを検証した。合わせて、各診療放射線技師の思考や行動すべき点に考察を加えた。

本稿により、診療放射線技師の知識情報の取得・活用による病院内での役割の向上と医療への貢献が期待できる。

3. 先行研究

既述のとおり片桐²によれば、診療放射線技師は病院組織内で医師、看護師をはじめとする医療専門職を結ぶ位置にあり、医師、看護師をはじめとする医療専門職の結節点に位置するにもかかわらず、診療放射線技師の病院内での役割が向上し、医療への貢献できていない事実がある。外部で得た知識情報を伝達する方法として、Allen and Cohen³、Allen⁴のゲートキーパーの概念がある。また原田はゲートキーパーの概念を発展させて、組織特有の知識へと転換するトランスフォーマーの存在を明らかにし、それを3段階のコミュニケーション・フローとして定義した⁵。内容はゲートキーパーが得た外部情報がトランスフォーマーの知識変換機能を経由して組織内部にもたらされると述べている。本稿では原田が提示する3段階コミュニケーション・フローのフレームワーク⁵を道いて命題を検証する。なお、3段階コミュニケーション・フローについての研究は大塚⁶や原田⁷などがある。

4. 研究方法

4-1. 研究のフレームワークおよび命題

本稿では、診療放射線技術の知識取得伝達に関して、既述の原田⁵の3段階コミュニケーション・フローを参考に、①院外で取得した診療放射線技術の所属部署への伝達・活用、②診療放射線技師から医師、看護師をはじめとする医療専門職へ伝達・活用するプロセスの2点を分析した。本稿では原田⁵ゲートキーパーを院外の研修会、学

会で得た診療放射線技術の知識情報を参加しなかった同僚診療放射線技師に伝達する人物とおき、原田⁵トランスフォーマーを診療放射線技術の知識情報を医師や看護師、他専門職に伝達する人物と置いた。その研究フレームワークを図1に示す。

次に本稿では診療放射線技師が業務拡大統一講習など外部で学んだことを医師、看護師をはじめとする医療専門職に認識してもらうことを目的とし、①院外で取得した診療放射線技術の所属部署への伝達・活用、②診療放射線技師から医師、看護師をはじめとする医療専門職へ伝達・活用するプロセスを分析するため、検証すべき2つの命題を設定した。命題は以下のとおりである。
命題1: 診療放射線技師は、院外から情報収集・取得した診療放射線技術に関する知識情報を所属部署に効果的に伝達し、活用している。

命題2: 所属部署に伝達され・理解された診療放射線技術に関する知識情報が医師、看護師をはじめとする医療専門職へ伝達され、活用されることにより業務の効率が上がり、医療の質向上への貢献ができる。

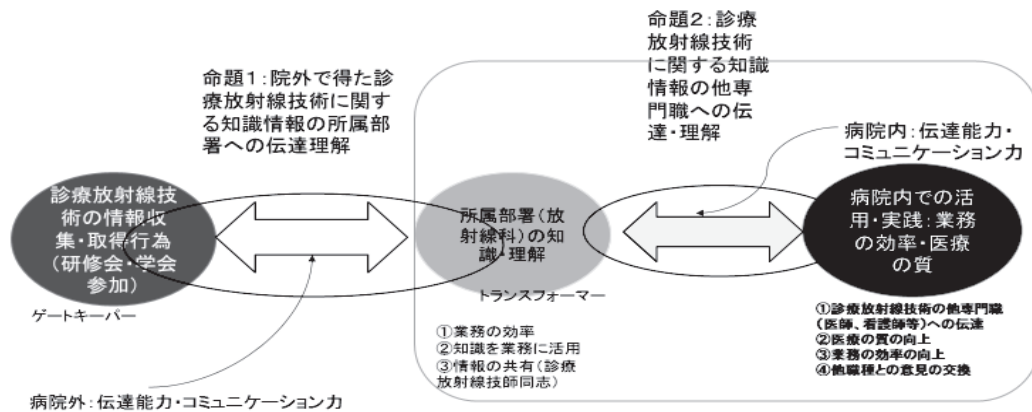
4-2. 分析用データについて

4-2-1. 定量分析

本研究で用いる分析用データは、病院に勤務している診療放射線技師に送付したアンケート調査によって得られた定量的データである。

定量的データ収集のために行ったアンケート調査の実施方法は、次のとおりである。アンケート送付先は現在現場で働く診療放射線技師で協力の得られた100人に2017年8月上旬に2017年8月31日までに回答するよう、①プロフェッショナルリズムに関して、②院内・院外のコミュニケーション、③業務について学んだことの、学習効果について、④職場環境について質問数50のアンケートを依頼し、回答を得た。回答者に4-2-2.に示すアンケート事項について5段階リッカートスケールで回答してもらった。今回のアンケート対象者

図 1 病院組織における診療放射線技術の知識取得伝達：命題 1 と命題 2 の位置づけ



筆者作成

である診療放射線技師の所属している施設の病床数は、1000 床以上 41%、500 ～ 999 床 19%、300 ～ 499 床 26%、100 ～ 299 床 12%、99 床以下 2%、所属病院の診療放射線技師の年齢構成は 20 代 21%、30 代 32%、40 代 25%、50 代 21%、60 代 1%、役職構成は係員 53%、主任クラス 15%、主査・係長クラス 23%、副技師長・課長補佐クラス 4%、課長・主幹・技師長クラスは 5%という構成になっている。

4-2-2. 分析に使用したアンケート質問項目

今回実施したアンケートは、質問数 50 問である。本稿では、その中で命題 1 と命題 2 を検討するために使用した質問は抜粋して記載する。なお、これらの質問作成に際しては、①プロフェッショナルリズムに関しては瓜生原⁸を参考とし、②院内・院外のコミュニケーションに関しては原田⁷や安田⁹を参考とし、③学習効果については荒木¹⁰を参考とし、④職場環境については荒木¹¹を参考に、それぞれ質問内容を検討した。

4-2-3. インタビュー調査

本稿では、アンケート結果を元に、アンケートの回答値の平均値が上位 1 位と 2 位のものをベ

トプラクティス、回答値の平均値が最下位のものワーストプラクティスと分類し、それら以外のその他も含めて、インタビューを行った。インタビュー内容は以下のとおりである。

命題 1（院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解）

①学習意欲、②職場環境、③同業者交流について
命題 2（診療放射線技術の他専門職への伝達・理解）

①他専門職とのコミュニケーション、②生涯学習の取組みについて

5. 定量データの分析方法

本稿では命題 1 と命題 2 の検証のため、重回帰分析及び記述統計の方法を用いた。

5-1. 命題 1 の検証方法

5-1-1. 重回帰分析：命題 1（院外で得た情報の所属部署への伝達・理解）

①業務の効率、②業務への活用、③情報共有（部署内：診療放射線技師同志）を従属変数として重回帰分析し、因果関係を調べた。判断指標として t 値 ± 2 以上、 p 値 5%以内とし、独立変数及び従属変数を表 1 に示す。

5-1-2. 記述統計：(命題1：院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解)

次に、生涯学習など学習意欲、自律性、情報伝達、知識伝達、業務の効率、業務への活用、情報共有について、分析で使ったリッカート尺度を使い平均値と標準偏差を出し比較した(表5)。本稿では最も平均点が高い項目を、重点項目とした。

5-1-3. インタビュー内容：命題1(院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解)

- ①学習意欲：積極的に研修会・学会参加し技術の習得に努めているかどうか
- ②職場環境：院内に妨げるものがなく、研修会・学会に参加ができる環境下にあるかどうか
- ③同業者交流：積極的に院外同業者とコミュニケーションを取り、専門的知識や技術の向上に努めているかどうか

5-2. 命題2の検証方法

5-2-1. 重回帰分析：命題2(診療放射線技術の他専門職への伝達・理解)

- ①情報共有(診療放射線技術の他専門職への伝

達)、②医療の質の向上、③業務の効率、④意見の交換、を従属変数とし重回帰分析し、因果関係を調べた。判断指標としてt値±2以上、p値5%以内とし、独立変数・従属変数を表2に示す。

5-2-2. 記述統計：命題2(診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解)

次に責務、社会的責任、自己規制、生涯学習、自律性、他者への尊重、他者との協働、技術の探求、情報の共有、医療の質の向上、業務の効率、意見の交換、について、分析で使ったリッカート尺度を使い平均値と標準偏差を出し比較した。本稿では最も平均点が高い項目を、重点項目とした。

5-2-3. インタビュー内容：命題2(診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解)

- ①生涯学習の取組み：あなた自身患者の期待に応えられるよう生涯を通して学習し、専門的知識と技術を向上させようと思うかどうか
- ②他専門職とのコミュニケーション：あなた自身、他専門職と積極的に意見を交換しているかどうか

表1 命題1(院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解)の独立変数と従属変数

独立変数	日本放射線技術師会に所属している	
	日本放射線技術学会に所属している	
	日本放射線技術師会・日本放射線技術学会以外に所属している学会は？(複数選択可)	
	あなたの学会参加の回数は(年平均)	
	あなたの院外研修会参加は(年平均)	
	あなたの取得専門・認定技師 資格名(複数選択可)	
	業務に関する読書時間(1か月平均)	
	業務に関する参考図書への購入(個人的に：1年間あたり)	
	院外同業者との交流(飲食を含む)の回数(1年間あたり)	
	あなたが部署内で飲食やレクリエーションに何回参加しましたか？(1年間)	
	あなたの部署内(放射線技師)業務上のミーティング・研修会参加回数(1年間)	
	あなた自身、患者の期待に応えられるよう生涯を通して学習し、知識と技術を向上させようと思う	①業務の効率
	あなたは、専門家集団でない依頼人や組織からの外的圧力でなく、自身で決断を行っていると思う	②業務への活用
	学会、院外研修会(研究会)で学んだことを積極的に部署(放射線技師)の誰かに伝えていると思う	③情報共有
従属変数	あなたは仕事上で、自分の意見や提案を積極的に所属部署内に伝えていると思う	
	あなた自身、放射線技術に関し、失敗をおそれず新しい方法を試している(研究している)	
	学んだことで業務の効率が向上したと思う	
	学会、院外研修会(研究会)で学んだことが業務に取り入れたことが多くなったと思う	
	所属部署内で、情報共有はされていると思う	

表 2 命題 2（診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解）の独立変数と従属変数

独立変数	あなたの取得専門・認定技師をもっているか？	
	業務に関する読書時間(1か月平均)	
	業務に関する参考図書を購入 (個人的に:1年間あたり)	
	院内研修会の参加回数(1年間で)	
	院内カンファレンスの参加回数(1年間で)	
	あなたは、自分の都合に関係なく、常に一定以上で患者の期待に思っていると思う	責務
	あなたは、社会の利益を考えて働いていると思う	社会的責任
	あなたは、職務の質を担保するため、個々人が常にベストを尽くすとともに、専門家同士が基準を遵守し統制し合っていると思う	自己規制
	あなた自身、患者の期待に応えられるよう生涯を通して学習し、知識と技術を向上させようと思う。	卓越性
	あなたは、専門家集団でない依頼人や組織からの外的圧力でなく、自身で決定を行っていると思う	自律性
	全ての医療専門職、患者とその患者を尊重し、自分の医療行為が正しく尊重されるような努力をしていると思う。	他者への尊重
	医療に関わる全ての人々と協働し、患者の期待に思っていると思う。	他者との協働
	あなた自身、放射線技術に関し、失敗をおそれず新しい方法を試している(研究している)	技術の探求
従属変数	学んだことを他専門職(医師、看護師等)にも共有できていると思う	①情報共有
	学んだことが「医療の質」の向上に役に立っていると思う	②医療の質の向上
	学んだことで業務の効率が向上したと思う。	③業務の効率
	あなた自身、他専門職と、活発に意見を交換している	④意見の交換

6. 検証結果

6-1. 命題 1：院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解

6-1-1. 命題 1 に関する重回帰分析

命題 1 に関する重回帰分析結果を表 3 に示す。分析結果は次の通りである。

- ①「業務の効率」は、院外同業者（診療放射線技師）との交流生涯学習と学習意欲、情報伝達が t 値 ± 2 以上 p 値 5% を満たしていた。
- ②「業務への活用」は値 ± 2 以上 p 値 5% を満たす項目がなかった。
- ③「情報の共有」は生涯学習と学習意欲が t 値 ± 2 以上 p 値 5% を満たしていた。

6-1-2. 命題 1 に関する記述統計

命題 1 に関する記述統計の結果を表 4 に示す。平均値と標準偏差より、「生涯学習と学習意欲」が 4.21 と平均値が高く、「知識伝達」2.92 と平均値

が低い結果となった。

6-1-3. インタビュー結果

インタビュー結果を表 5 に示す。

インタビュー結果では命題 1 に関して、ベストプラクティスの 2 人とも次の回答を得た。

①学習意欲

学会発表、研修会参加に積極的である。

②職場環境

技術習得に関し、上司が部下同志、専門的知識、技術を習得するよう競争するよう促し、お互いに競争することでレベルアップする環境下になっている。

③同業者との交流

他施設との情報交換し新たな知識を得ることを念頭に、コミュニケーションを積極的とるように促している。

6-2. 命題2：診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解

6-2-1. 命題2に関する重回帰分析

命題2に関する重回帰分析結果を表6に示す。分析結果は次の通りである。

- ① 「医療の質の向上」に関しては、「生涯学習と学習意欲」と「自律性」がt値±2以上、p値5%以内を満たしていた。
- ② 「業務の効率」は「生涯学習と学習意欲」がt値±2以上、p値5%以内を満たしていた。
- ③ 「意見の交換」は「他者との協働」がt値±2以上、p値5%以内を満たしていた。

6-2-2. 命題2に関する記述統計の結果

命題1に関する記述統計の結果を表7に示す。平均値と標準偏差より、「生涯学習と学習意欲」が

4.21と平均値が高く、「技術の探求」が2.92、「情報の共有」が2.93と平均値が低い結果となった。

6-2-3. インタビュー結果

インタビュー結果を表8に示す。

インタビュー結果では命題2に関して ベストプラクティス2人とも次の回答を得た。

① 生涯学習の取組み（職場内）

学会発表、研修会参加、学位取得に積極的な環境下であり、部署内のメンバー全員が、生涯にわたって新しいことを貪欲に得ようとしている。

② 他スタッフとのコミュニケーション

他職種の業務を理解することで、診療放射線技師の業務を理解してもらうことができ、他職種からの協力、外部から得た知識を生かせる。

表3 院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解（命題1）：重回帰分析結果

従属変数		①業務の効率	①業務の効率	②業務への活用	②業務への活用	③情報共有	③情報共有
		t値	p値	t値	p値	t値	p値
独立変数	日本放射線技術学会に所属している	1.36	0.178	1.157	0.251	-0.892	0.375
	日本放射線技術学会に所属している	0.807	0.422	0.541	0.59	1.826	0.072
	日本放射線技術学会・日本放射線技術学会以外に所属している学会はあるか？	0.06	0.952	1.696	0.094	-0.726	0.47
	あなたの学会参加の回数は(年平均)	-0.596	0.553	-1.518	0.133	-1.247	0.216
	あなたの院外研修会参加は(年平均)	0.038	0.97	-0.322	0.749	0.885	0.379
	あなたの取得専門・認定技師 資格をもっているか	0.921	0.36	-0.056	0.956	0.658	0.512
	業務に関する読書時間(1か月平均)	0.338	0.737	0.106	0.915	-0.975	0.333
	業務に関する参考図書を購入 (個人的に:1年間あたり)	0.472	0.638	-0.895	0.373	-0.067	0.947
	院外同業者との交流(飲食を含む)の回数 (1年あたり)	-2.061	0.043	-0.874	0.384	-1.901	0.061
	あなたが部署内で飲食やレクリエーションに何回参加しましたか？(1年間)	1.655	0.102	-0.359	0.72	1.648	0.103
	あなたの部署内(放射線技術)業務上のミーティング・研修会参加回数(1年間)	0.213	0.832	1.601	0.113	0.666	0.508
	生涯学習と学習意欲	2.613	0.011	0.864	0.39	2.37	0.02
	自律性	0.425	0.672	1.369	0.175	0.346	0.73
	情報伝達	2.527	0.013	0.619	0.537	-0.806	0.423
	知識伝達	-0.447	0.656	-0.403	0.688	-0.179	0.858
	技術の探求	0.079	0.937	1.488	0.141	0.206	0.838

表4 院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解（命題1）：記述統計

	平均	標準偏差
生涯学習と学習意欲	4.21	0.71
自律性	3.41	0.93
情報伝達	3.40	0.93
知識伝達	2.92	0.89
業務の効率	3.64	0.88
業務への活用	3.12	0.72
情報の共有	3.54	0.87

表5 院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解（命題1）に関するインタビュー結果

	技師A	技師B	技師C	技師D
① 学習意欲	病院規模が大きくないにも関わらず、積極的に学会参加・発表を行っている	学会発表を積極的に行い、数多くの論文投稿をしている。博士号取得	学会・研究会は積極的に参加しているが、発表や論文投稿は少ない	学会発表を積極的に行い、数多くの論文投稿をしている
② 職場環境	学会等自由に参加でき、勉強会参加に非常に積極的な環境下である	学会発表、論文投稿など積極的に行え、医師をはじめ他スタッフの業務内容を積極的に理解しようとしている	外部情報を取り入れる環境下になく、書籍や医師の意見だけで行動。	本人は論文投稿を積極的に行い、外部同業者間では著名な方だが、部門内では認められていない
③ 同業者とのコミュニケーション	某都道府県技師会理事	研修会会長	元研修会幹事	某都道府県技師会役員

表6 診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解（命題2）：重回帰分析結果

従属変数		①情報共有	①情報共有	②医療の質の向上	②医療の質の向上	③業務の効率	③業務の効率	④意見の交換	④意見の交換
		t値	p値	t値	p値	t値	p値	t値	p値
独立変数	取得専門・認定技師をもっているか？	0.442	0.66	-0.696	0.488	0.369	0.713	0.188	0.851
	業務に関する読書時間(1か月平均)	-0.817	0.416	1.492	0.139	0.726	0.47	-0.895	0.373
	業務に関する参考図書への購入(個人的に:1年間あたり)	-0.943	0.348	-1.017	0.312	-0.426	0.672	-0.05	0.96
	院内研修会の参加回数(1年間で)	0.059	0.953	-1.209	0.23	-1.835	0.07	1.594	0.115
	院内カンファレンスの参加回数(1年間で)	0.585	0.56	1.08	0.283	1.554	0.124	1.616	0.11
	業務	-0.763	0.447	1.267	0.209	-0.485	0.629	-0.533	0.595
	社会的責任	0.592	0.556	0.093	0.926	1.042	0.3	0.314	0.754
	自己規制	-0.341	0.734	-0.797	0.428	0.398	0.692	-0.221	0.825
	生涯学習と学習意欲	1.524	0.131	3.94	0	2.407	0.018	0.316	0.753
	自律性	0.37	0.713	3.096	0.003	0.837	0.405	0.247	0.806
	患者への尊重	0.412	0.682	-0.932	0.354	0.609	0.544	1.242	0.218
	他者との協働	1.255	0.213	1.873	0.065	1.956	0.054	3.845	0
	技術の探求	1.84	0.069	0.131	0.896	0.278	0.781	-0.337	0.737

表7 診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解（命題2）：記述統計

	平均	標準偏差
責務	3.8	0.64
社会的責任	3.41	0.79
自己規制	3.64	0.81
生涯学習と学習意欲	4.21	0.71
自律性	3.41	0.93
他者への尊重	3.84	0.65
他者との協働	3.89	0.6
技術の探求	2.92	0.88
情報の共有	2.93	0.84
医療の質の向上	3.85	0.81
業務の効率	3.64	0.72
意見の交換	2.89	0.89

表8 診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解（命題2）に関するインタビュー結果

	技師A	技師B	技師C	技師D
①生涯学習の取組み（職場内）	大規模病院ではないが、外部勉強会や学会発表や学会参加を積極にする環境下である	診療放射線技師の学位取得、専門技師の取得に積極的な環境下である。学会発表なども積極的な環境下である	最近になって部署内勉強会を開催するようになった。未だ外部勉強会参加、学会参加は積極的ではない	職場内での勉強会は少なく、技術習得のための勉強会参加や研究会参加に積極的ではない
② 他スタッフとのコミュニケーション	後輩同士が技術取得に関して、競争し合えるようになっている	部署内職員が一丸となって、活動する環境である。	一部の先輩⇄後輩、若手同士は仲良くしているが、先輩⇄後輩はあまりうまくいってない	後輩に勉強会参加や研究を促すが、あまり言うことを聞いてくれない。職場外ではあまり交流がない

7. ディスカッション

7-1. 命題1（院外で得た診療放射線技術に関する知識情報の所属部署への伝達理解）に関するディスカッション

定量分析結果から、業務の効率をあげるには、重回帰分析結果より、院外診療放射線技師との交流、「生涯学習と学習意欲」、「情報伝達」が重要であり、情報共有は「生涯学習と学習意欲」が重要であるということが強く示されている。インタビ

ュー結果では、院外からの情報収取や職場環境、同業者のコミュニケーションの重要性が示唆された。

以上の定量分析結果とインタビュー結果により、診療放射線技師は、院外から情報収集・取得した診療放射線技術に関する情報を所属部署に効果的に伝達し、活用するには「生涯学習と学習意欲」つまり、生涯にわたって積極的な知識情報の習得と学習環境づくり、同業者のコミュニケーシ

ョンが重要であるということが強く示唆された。

7-2. 命題2（診療放射線技術に関する知識情報の他専門職への伝達・理解）に関するディスカッション

定量分析結果から、医療の質の向上に貢献するには、生涯学習・学習意欲と自律性が重要であるということが強く窺われる。医療チームの業務の効率をあげるには「生涯学習・学習意欲」が重要であるということが強く示唆されている。他スタッフとの意見の交換では、医療に関わる全ての人々と協働し、患者の期待に応えているということが強く出ている。インタビュー結果では、生涯学習に対する態度と他スタッフとのコミュニケーションの重要性が示された。

以上の分析結果とインタビュー結果の結果から、生涯にわたって積極的な知識情報の習得と他スタッフとのコミュニケーションの重要性が示された。

7-3. ディスカッションまとめ

診療放射線技師が院外で開催された学会や研修会等で得た知識情報を生かし、医療に貢献するために、各診療放射線技師は意欲的に生涯学習すべきであり、院外診療放射線技師との交流、医師、看護師をはじめとする医療専門職との交流を率先して行うべきといえる。インタビュー結果では、診療放射線技師の知識情報習得のための、①積極的な知識習得、②学習環境づくり、③他職種や他施設の診療放射線技師との交流、の3つが重要であると言える。

8. 結論

本稿から得られた結論として、診療放射線技師は診療放射線技術の知識情報の取得・活用し業務拡大をしたいと考えるならば、患者の期待に応えることを念頭に置き、①積極的な知識情報の習得、②学習環境づくり、③他職種や他施設の診療放射線技師との交流、を励行すべきである。

この3点を励行することで、診療放射線技師が病院外で得た知識情報を臨床の場で活用することが可能となり、医療チームの業務効率と医療の質が向上し、結果として診療放射線技師の病院内での役割が向上し、医療への貢献ができる。

最後に、本稿では100名の診療放射線技師を対象にアンケート調査を実施し論じてきたが、診療放射線技師が院外で得た知識情報が病院内で活用され、診療放射線技師の役割が明確化され、医療への貢献するためには、もっと多くの診療放射線技師の意見を聞き、論じていくことを今後の課題としたい。

参考文献

- (1)日本放射線技師会ホームページ <http://www.jart.jp/> 2014年
- (2)片桐邦彦：「診療放射線技師の役割の実態と可能性」日本経営学会第91回大会要旨集2017年 pp.331-332
- (3)Allen and Cohen, Information Flow in Research and Development Laboratories Administrative Science Quarterly Vol.14, 1969年 No.1, pp.12-19
- (4) TJ Allen, Managing the flow of technology technology transfer and the dissemination of technological information - Boston, Mass.: Massachusettes Institute of Technology, 1977年
- (5)原田勉：「研究開発組織における3段階のコミュニケーション・フロー - ゲートキーパーからトランスフォーマーへ」『組織科学 32(2) 1998-12』1998年 pp.78-96 1998年
- (6)犬塚篤：「3層知識ネットワークデータを用いた知識変換の影響力の定量化：ゲートキーパー・トランスフォーマー機能の再検討」, 組織科学 Vol.43, No.4, 2010年 pp.46-58
- (7)原田勉：「技術革新プロセスにおける情報フー媒介性の検討」, 経営行動科学 Vol.13 1999年 No.1, pp.33-42
- (8)瓜生原葉子：「医療の組織イノベーション」中

央経済社 2012年

(9)安田雪「実践ネットワーク分析」新曜社 2001年

(10)荒木淳子「企業で働く個人のキャリアの確立を促す実践共同体のあり方に関する質的研究」日本教育工学会論文誌 No.2, 2009年 pp.131-142

(11)荒木淳子「企業で働く個人の「キャリアの確立」を促す学習環境に関する研究——実践共同体への参加に着目して——」日本教育工学会論文誌 No.1, 2007年 pp.15-27